第３学年４組　美術科学習指導案

指導者　小倉　千絵

１　単元名　アートキュレーション

２　題材について

⑴ 生徒の実態

本学級の生徒は、昨年度の鑑賞学習で日本の美術文化についての造形的な見方・感じ方を広げた。特に、葛飾北斎「神奈川沖浪裏」の鑑賞活動では、富士山と荒波の静と動の対比から、自然豊かな日本とその自然の脅威に立ち向かう日本人のたくましさを感じ取ったり、その対比構造を一体化する緻密な構図から視覚表現の複雑さを捉えたりする記述が多く見られ、鑑賞に関する資質・能力は十分に身に付いている。

本学級の生徒の美術作品に対する認識を知るため、意識調査（令和５年５月/３年４組 36 名に対して実施）を行った。「将来、美術作品を購入・所有したいと思いますか。」という質問についての回答は、「思う 39%」、「思わない 34%」、「わからない 26%」であった。60%の生徒が、自分の将来の生活の中に美術作品がある風景をイメージしていないことが分かった。次に、「美術作品がある場所として１番に思い浮かぶのはどこですか。」という自由記述式の質問には、「美術館」と回答した生徒が 70%、次に「博物館」が多く、その中には「芸術館」「ルーブル美術館」など具体的な施設名称の回答もあった。その他に「ギリシャ」「フランス」「公共施設」「偉い人の家」という回答が１名ずつであった。美術作品は、美術館や博物館など公的施設にあるという認識をしている生徒は 90%を越え、それは当然の事実である。しかし、新しい社会においても、これから生まれる美術作品の数々は美術館の中に収まり続けるものなのだろうか。これからの社会を豊かにしていくためには、もっと広い視野で、柔軟な思考が必要ではないかという問いをもつ。新しい美的価値を生み出したり、美術との関わりを問い直したり、自分なりの「美」の捉えによって価値を見出す生徒の姿を目指したい。

⑵ 題材観

本題材では、美術作品の展示企画(キュレーション)を体験的な鑑賞活動として題材化し、美術作品から感じ取った価値について、どのような場所に展示すれば生活や社会に新たな価値を生み出すかを思考する授業を行う。これは、第２学年及び第３学年Ｂ鑑賞（１）ア(ア)「造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の心情や表現の意図と創造的な工夫などについて考えるなどして、美意識を高め、見方や感じ方を深めること。」の指導に関わる内容である。また、この項目について、「解説」では、「鑑賞は単に知識や定まった作品の価値に学ぶだけの学習ではなく、知識なども活用しながら自分の中に作品に対する新しい価値をつくりだす学習であると捉えることが重要である。」と示しており、本題材の目指すところである。

「キュレーション」とは、一般的に、「キュレーター（学芸員)」が行う企画展示を指すものであり、本来、その公開により達成される活動である。題材化にあたっては、「企画展示」を「企画」と「公開」の２つの活動に分け、学習活動として構成した。「企画」の活動では、デジタルツールを活用した企画プレゼンテーション資料を作成する。「公開」の活動では、プレゼンテーションについての多様な他者との意見交流を行う。本題材は、生徒一人一人が自分の中に新しい価値をつくり出すことがねらいであることから、展示公開の実現を活動の目的とはしない。

⑶ 指導観

指導にあたっては、多様な他者との意見交流を通して、生徒が自分の中に芽生えた価値の真価を他者に問いかけ、フィードバックできる活動を充実させたい。まず、芸術家と交流し、その作品について語り合うことで、同じ今を生きる人の手によって生み出された美術作品と自分たちが共にあるという実感をもたせたい。そのうえで、作品から捉えた「美」と自分が生きる世界とのつながりに気付き、自分なりの鑑賞の視点をもって展示企画を考えられるようにする。さらに、その企画プレゼンテーションの公開の活動では、生徒の捉えた「美」について、客観的に解釈し、生徒に語り返すことができる専門的知識のある聞き手と出会わせることで、自分なりの美意識や多様な美の捉えに気付かせ、美的価値を探究していく意欲や姿勢を育てたい。

３　題材の目標

○　彫刻作品のよさや美しさについて、形や色彩、素材などの性質やそれらが感情にもたらす効果、造形的な特徴などを基に、全体のイメージや作風などで捉えることを理解する。

〔知識及び技能〕

○　造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の訴えたいことや表現の意図と創造的な工夫、社会における美術の力について考えるなどして、美意識を高め、見方や感じ方を深める。

〔思考力、判断力、表現力等〕

○　美術の創造活動の喜びを味わい、主体的に美術作品や美術文化などの見方や感じ方を深める鑑賞の学習活動に取り組んでいる。　「学びに向かう力、人間性等」

４　単元(題材)の学びの価値とそれを実感させるための手立て

(1) 単元（題材）の学びの価値

展示企画するって無限だ

美術科が考える学びの価値は「美と捉えるって無限だ」である。本題材は、「企画」と「公開」の活動で構成していることから、２段階で「美」の捉えを深めることができる。つまり、①美術作品から感じ取る美的価値、②展示空間として創り出す美的価値である。さらに、その展示企画を多様な他者が鑑賞することによって、新たな美の捉えが生み出されていく無限性の気付きにつなげたい。

(2) 単元（題材）の学びの価値を実感させるための手立て

①　「キュレーション」の教材化

「企画」と「公開」の活動内容について、「企画」活動では、デジタルツールを活用し、企画プレゼンテーション資料を作成する。作成にあたっては、作品鑑賞の活動の際に、感じ取った「美」のイメージを基に作品撮影を行い、画像データをつくる。次に、企画展のタイトルを考え、どのような場所に展示するのか、展示コンセプトを考える。プレゼン資料として、場所の画像に作品画像を合成させて展示のイメージ画像を作る。感じ取った「美」の言語化と視覚化をすることで、自分の中に生み出された新しい価値を実感させたい。「公開」の活動では、プレゼン発表の意見交流会を行う。多様な他者との意見交流を通してその真価を生徒にフィードバックすることで、多様な美の捉えを学び、その可能性と無限性に気付かせたい。

②　多様な他者との交流

（ア）　現代彫刻家との交流

茨城大学教育学部美術科教育の島剛教授を授業に招く。島氏は現代彫刻家として活躍する芸術家である。作品は、３期に分類され、第１期・第２期は、生命のエネルギーを造形化したち抽象彫刻を主とし、現在の第３期は、古代ローマ・ギリシャ彫刻に通じる具象彫刻を発表している。島氏との交流では、生徒からのインタビューに答えていただく。実物の彫刻作品の圧倒的なエネルギーと、美術の本質を知る人間の存在に触れることで、美術そのものへの心理的距離を近付けられるようにする。

（イ）　有識者や専門家との意見交流

展示プレゼンテーションの発表の聞き手として、美術の有識者や専門職に就く人々に協力を依頼した。企画プレゼンはグループ発表形式で行い、各グループに１名ずつゲストを招く。それぞれの立場や経験から意見交流を行うことで、生徒個人の「美」の捉えが、専門的な見方や多角的な視点で、客観的に捉え直す体験となる。ゲストにとっても、生徒たちの視点を新たな智慧として獲得できれば、参加者全員がこれからの美術について考える有意義な時間となると考える。

③　「美術と社会」という視点を問う導入の工夫

「美術と美術文化の継承と創造」を考えるために必要な「美術と社会」の視点を捉えるために、日本美術出版教科書「美術２・３下」の「あの日を忘れない　美術の力を考える」に掲載されているパブロ・ピカソ作「ゲルニカ」を題材の導入として鑑賞する。ここでは、最も有名な反戦芸術という安易な感情理解に終始しないよう、この作品がパリ万博閉幕後、母国スペインに収蔵されるまでに、40 年以上の歳月がかかったことなどの事実にも触れ、表現の自由とそれゆえの社会的影響力や、今、私たちが生きる現代にどのように存在しているかを考え、「美術と社会」と言う視点をもてるようにしたい。

指導と評価の計画（５時間扱い）

時間		○…評価規準【評価方法】	知・技	思・判・表	主体的	学習内容・活動	○指導上の留意点 ◎規準を満たすための手立て ★題材の学びの価値を実感させるための手立て
次	時						
1	1	○　形や色彩、素材などの性質やそれらが感情にもたらす効果、造形的な特徴などを基に、全体のイメージや作風などで捉えることを理解している。 【ワークシート】	①			○　ピカソ作「ドラ・マールの肖像」、「座る女」、「泣く女」、「ダニエル・ヘンリー・カーンワイラーの肖像」の比較鑑賞から、キュビズムの方法論とその変遷について考察し、それぞれのよさや美しさについて味わう。	○　ピカソの「キュビズム」技法の人物画を比較鑑賞することで、「多角的視点」や「時間の再構成」、「空間の再構成」について捉えられるようにする。 ◎　タブレット端末上で写真編集機能を用いてキュビズムの方法論を追体験することで、形の分解と再構成のイメージを掴めるようにする。 ★　「キュビズム」の変容から、美の追求の無限性や芸術家の生き方について見方や感じ方を深められるようにする。
	2	○　造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の訴えたいことや表現の意図と創造的な工夫、社会における美術の力について考えるなどして、美意識を高め、見方や感じ方を深めている。 【観察・ワークシート】		①		○　「ゲルニカ」の誕生と所蔵場所の変遷から、社会における美術の力について考える。	◎　「ゲルニカ」に描かれた対象とキュビズムの表現技法から主題に迫り、反戦感情を理解できるようにする。 ○　前時の学習内容や社会科の歴史の知識を生かし、作者の訴えたいことや表現の意図について考えるように声を掛ける。 ★　「ゲルニカ」の誕生や保管場所の移転など、作品にまつわる事実から社会における美術の存在について捉えられるようにする。
2	1	○　造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の訴えたいことや表現の意図と創造的な工夫、社会における美術の力について考えるなどして、美意識を高め、見方や感じ方を深めている。 【観察・ワークシート】 ○形や色彩、素材などの性質やそれらが感情にもたらす効果、造形的な特徴などを基に、全体のイメー	①	②		○　現代彫刻家島剛の作品を鑑賞し、そのよさや美しさを味わう。 ○　現代彫刻家と作品について話し合う。	○　彫刻作品は、360 度で捉え、その形や素材からも表現の意図と創造的な工夫を感じ取るなど、鑑賞の視点を確認する。 ◎　作家の言葉や実物の鑑賞から、自分なりの見方や感じ方を深められるようにする。 ○　プレゼンテーション資料作成のため、作家に撮影許可をとる。 ★　作家と対面することで、社会における芸術家の存在や美術の力を実感することができるようにする。

		ジや作風などで捉えることを理解している。 【観察・ワークシート】					
	2	○　造形的なよさや美しさを感じ取り、作者の訴えたいことや表現の意図と創造的な工夫、社会における美術の力について考えるなどして、美意識を高め、見方や感じ方を深めている。 【観察・プレゼンテーション資料】		③		○　島剛氏の作品の展示企画を考え、プレゼンテーション資料を作成する。	◎　自分なりの造形的な見方や感じ方を基に、捉えたよさや美しさを根拠に、社会における美術の力を発揮できる展示企画を考えるようにする。 ○　プレゼンテーション資料は、タブレット端末で作成する。 ○　使用ツールは、生徒の目的に応じて選べるようにする。
	3 （本時）	○　美術の創造活動の喜びを味わい、主体的に美術作品や美術文化などの見方や感じ方を深める鑑賞の学習活動に取り組んでいる。 【観察・ワークシート】			○	1　本時の学習課題を確認する。 展示には、どのような可能性があるだろうか。 2　ゲストを招き、企画案を発表する。 (1) 6人グループに、1名のゲストを招き、1人ずつ発表する。 (2) ゲストの意見から、どのような価値が生み出せる可能性があるのかを考える。 3　全体に向けたゲストの感想を聞き、本時の活動を振り返る。	○　作品に対する見方や感じ方を基に、展示企画を考え、話し合う活動についても、美術の創造活動の一環であることを実感できるようにする。 ○　個々の発表に対して、ゲストを交えた意見交流ができるように十分な時間を確保する。 ○　異なった見方や感じ方を尊重する雰囲気をつくる。 ○　発表には、タブレット端末を活用し、視覚情報を効果的に用いて、わかりやすく伝えることができるようにする。 ◎　他者の企画発表や専門知識のあるゲストの反応や意見交流により、自分なりの見方や感じ方の深まりを実感できるようにする。 ○　本時の学習内容を振り返り、生涯にわたって美術や美術文化と豊かに関わっていく上で、自分なりの美意識を高めていきたいという意欲につながるようにする。 ★　作家やゲストなど、多様な他者との交流を振り返り、自分を取り巻く生活や社会には美と捉える対象が無限にあることに気付くことができるようにする。